昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年1月20日発行(毎月1回20日発行)
建築雑誌 | 第133集 | 第1706号

日本建築学会 Architecture Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol. 133 No. 1706

建築雑誌 2018 01

特集 01

建築と学び

Architecture and Learning

——建築の学びはこのままでいいのだろうか?

これが本特集の底に流れている関心である。実は本特集の担当者である山崎は、昨年来本格的に建築教育に携わり始めた新米教員だ。勤務校や他校の様子を見聞きするなかで、設計演習を主軸に構成される建築教育の実態を肌身で感じるようになった。

言うまでもなく、設計演習は、全国の高等教育機関で必修科目として展開されているはずだ。教員は課題を与え、学生がそれぞれに建築物を構想し、図面や模型を用いて内容を目に見える形に定着し、プレゼンテーションを行う。設計[illegible]のイロハを習得するための[illegible]習科目として実践されている[illegible]ろう。課題は、住宅や小学[illegible]保育園、美術館、市民ホ[illegible]など、学生の習熟度と、規模[illegible]プログラムの複雑さを勘案し[illegible]決定される。提出までの数週[illegible]、数

『建築雑誌』[2018-19]
編集方針

編集コンセプト「学びとしての建築」

本委員会では建築について「学び」をメタファーにして考える。それは単に大学等での学びだけでなく生涯学習や実務における研修、市民による学びなどを含む。また「学び」を通じて社会の変化に対する建築の実態と課題を明らかにするとともに、社会の変化に対する実態と課題を明らかにする装置としての建築の役割を広く伝えていくことに取り組む。

以上の全体コンセプトをもとに、以下の編集方針を定めたい。

論——例えばリノベーションや統廃合——についてどれほど検討されているのだろうか。

[illegible]か。

[illegible]それも多[illegible]くの学[illegible]って実務上一[illegible]出会わないよ[illegible]ログラムが与[illegible]れてはいない[illegible]うか。いや、[illegible]られていても[illegible]ないのだが、[illegible]ならば出題の[illegible]は学生に[illegible]いているだろうか。あるいは、学生が毎週ひねり出してくる案を前にしたエスキスには、どのような教育効果が想定され、達成されているのか。教員は学生のモチベーションを学生個人の資質に丸投げしていないか。設計演習における図面や模型は何のために生み出されるものなのか。課題に対するリアクションの突飛なもの、いわば大喜利の問答のような作品を過剰に評価していないか。言い換えれば、現在の設計教育は、設計の教育になっているだろうか? という問いである。

一方、いわゆる設計演習のような個人作業とは別路線で、ワークショップを取り入れた事例を耳にすることも多い。建築教育委員会がまとめたワーク

[全文>>>p.005]

地のリサーチと、エスキスと呼ばれる教員−学生間のディスカッションの時間が設けられている……。多少の差異こそあれ、設計演習の多くは、以上のようなプロセスで組み立てられているだろう。

ではそこで、人口減少に向かう現代社会を象徴する方法

編集方針——1 歴史に学び、ポストオリンピックの日本における建築の未来を占う

オリンピック・パラリンピック東京大会の開催される2020年を1964年と比較すると2018-19年は開催前夜の1962-63年と比較されるかもしれない。1964年には人口の増大と大都市への一極集中への対処が議論されていたが、今なら急激な高齢化と少子化に伴う人口の減少と、地方や郊外への拡散が議論される。1964年以後の日本では東京への集中投資が続き超高層や都市再開発による巨大建築への展開が進む一方、「国土の均衡ある発展」が議論され後の「列島改造論」へと続いた。2020年以後においても国内外での都市間競争のなかで建築も役割を見いだすかもしれないし、建設業全体は空き家の除却やインフラの輸出について本格的に取り組むようになるかもしれない。

本委員会では、このような歴史的視点をもとにポストオリンピックの日本における建築の行方を占う。

編集方針——2 特集を2本立てとすることで、大特集主義を解体する

日本建築学会は会員規模が大きく、また読者の専門が広範囲にわたっているということもあり、会誌の特集はいずれも「話題が偏っている」「興味を引く話題が少ない」という評価を引き寄せてしまいやすい。そこで本委員会では五十嵐太郎委員会(2008-09)が行っていたように毎号の特集を原則2本立てとすることで大特集主義を解体し、話題を分散させ、より多くの読者の関心に重ねやすくしたい。

特集 02

デジタル(のよう)に学ぶ

Learning from/as the Digital

未来の建築教育のプロトタイプを考える

本特集は2000年代の初頭に成年期を迎えた、生まれた時からインターネットが存在する「デジタルネイティヴ」と呼ばれる「ミレニアル世代」による建築の学び論である。急速に進化するテクノロジーや多様化する価値観等、社会構造が抜本的に変化しつつある現代において、建築家に求められる役割も大きく変化しつつある。本特集では6名のミレニアル世代の実践者の活動と座談会を通して、未来の建築教育のプロトタイプを考えたい。[秋吉浩気+藤田慎之輔]

特集 VOL.

にあたって、下記に用語の[illegible]を記す。デジタルとは——一般的に、離散的(ディスクリート)である事を言う。コンピューターを構成する0/1やDNAを構成するA/G/C/Tのように、連続的な情報を要素単位に細分化する事で、「離合集散」でき、「バラバラに切り離したり集めたりできる」仕組みであると定義する。

デジタル技術とは|具体的には、後述する座談会や実践紹介で言及されるPythonなどのプログラミング言語や、3Dプリンタなどのデジタルファブリケーションの事である。本特集ではより広[illegible]義な意味合いとして、情報と物[illegible]質、[illegible]インとエンジニ[illegible]ング、設計と[illegible]、アカ[illegible]スムと社会、施主と建築家といった「分断された対立項を等価に扱うことができ、両者の間を自由に行き来できる媒介技術」であると定義する。

デジタル(のよう)に学ぶとは|原広司が「コンピューターを活用する都市と建築」と「コンピューターのような都市と建築」の差異を指摘したように、「デジタル技術を自由自在に扱うことのできる人材を創出する事」と「デジタル技術のような人材を創出する事」を明確に区分する必要がある。

[全文>>>p.022]

編集方針——3 第1特集:各分野の議論をリサーチし、広範なトピックを扱う

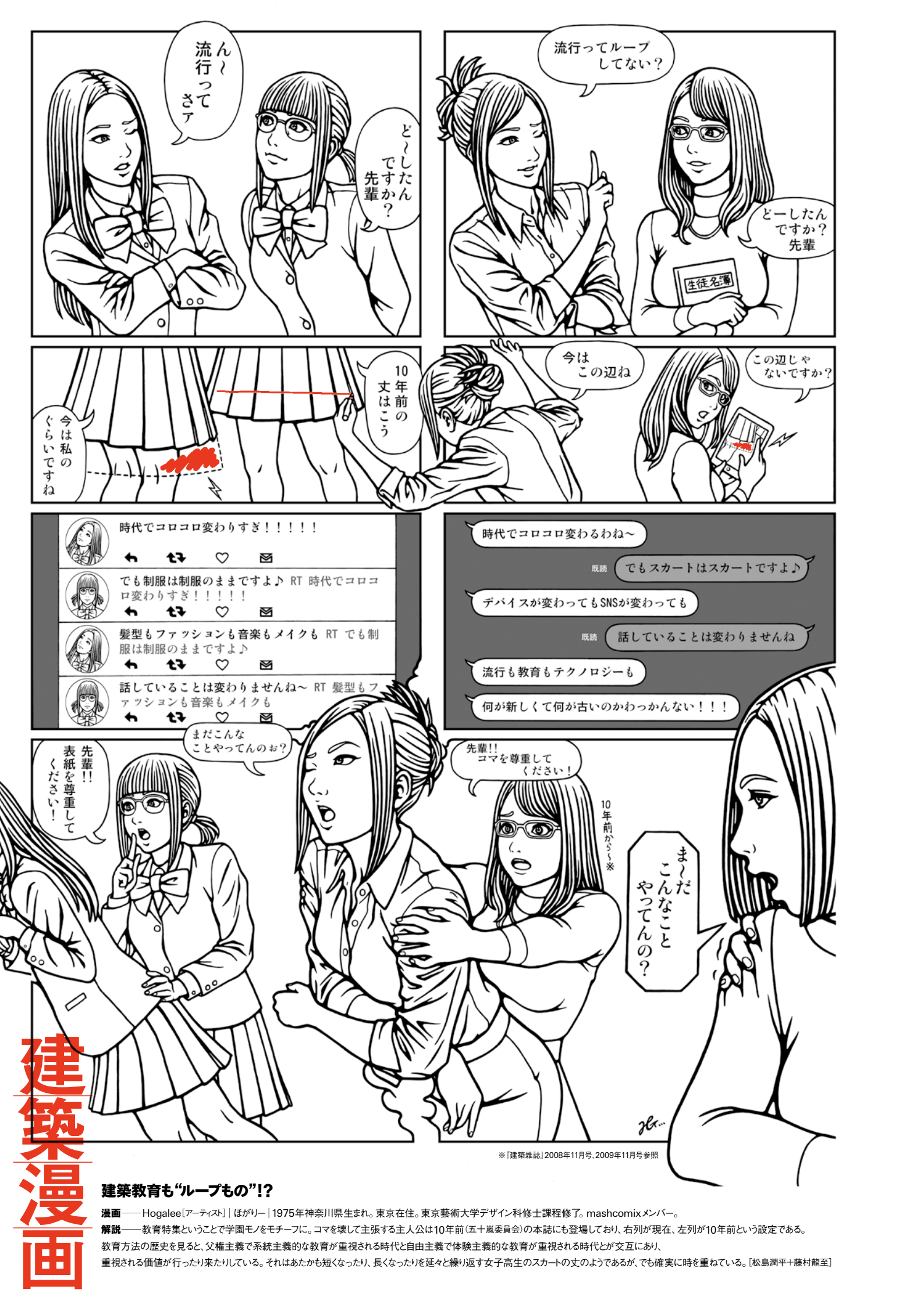
過去20年間の編集委員会の目次一覧を概観すると、[1]社会的な話題を扱うもの、[2]建築デザインに関するもの、[3]専門(構造・材料・環境・都市・防災等)に関するものがおおむね1/3ずつ扱われているようである。本委員会においても第1特集においてはそれに倣い、各分野の議論をリサーチし、広範なトピックをバランスよく扱うことで会員相互の議論のプラットフォームとしての会誌の役割を果たす。

編集方針——4 第2特集:萌芽的、実験的なトピックを扱う

第2特集はできるだけ萌芽的、実験的なトピックを扱う。編集委員が当事者意識を大事にしながらそれぞれの関心や興味を持つ話題を生々しく扱い、歴史的視点や分野横断的視点によって多世代・異分野を巻き込むような編集を行う。

編集方針——5 連載:会員相互の交流と若手会員の増強に寄与する

近過去の会誌の連載企画に着目し、かつての名物コーナーである「技術ノート」を復活させることなどで会員相互の交流に役立てる。また、現役の大学院生や若手の社会人が参加するようなコーナーを設け、20-30代会員の増強に寄与する。



※『建築雑誌』2008年11月号、2009年11月号参照

建築漫画

建築教育も“ループもの”!?

漫画——Hogalee［アーティスト］｜ほがりー｜1975年神奈川県生まれ。東京在住。東京藝術大学デザイン科修士課程修了。mashcomixメンバー。

解説——教育特集ということで学園モノをモチーフに。コマを壊して主張する主人公は10年前（五十嵐委員会）の本誌にも登場しており、右列が現在、左列が10年前という設定である。教育方法の歴史を見ると、父権主義で系統主義的な教育が重視される時代と自由主義で体験主義的な教育が重視される時代とが交互にあり、重視される価値が行ったり来たりしている。それはあたかも短くなったり、長くなったりを延々と繰り返す女子高生のスカートの丈のようであるが、でも確実に時を重ねている。［松島潤平＋藤村龍至］

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年2月20日発行(毎月1回20日発行)
建築雑誌 | 第133集 | 第1707号

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol.133 No.1707

建築雑誌 2018 02

特集 03

みんなのけんちく

Architecture for All

本特集では「みんなのけんちく」と題して、共同設計による建築の戦後日本における展開について振り返る。ここで言う「みんな」とは、建築家をはじめとする、設計に参加するさまざまな関係者を指す。時代の移り変わりのなかで「みんな」の範囲や意味は変化し続けたが、設計者/利用者というような主体/客体の二分法が失効し、多様な主体の関係性が重視される現在においては、それはどのようにあるべきだろうか?

ここでは、共同設計を建築家の特権性を喪失させるものとして嘆くことなく、あるいはただ大勢の人に支持されればよいというポピュリズムに陥ることなく、新たな設計論を生み出す契機としてポジティブに捉え直し、現代の建築が取りうる新たな可能性を模索したい。以下では、特集の前提となる「みんなのけんちく」にかかわる試みの歴史を概観する。

1945-1970:
国家主義への反省としての「みんなのけんちく」

終戦を機に国家主義に対し批判的な立場をとった戦後民主主義の思想と共振し共同設計を旨とするべきだという意見が若い世代を中心に立ち上がる。「建築の民主化」を掲げたNAU設立(1947)や、グロピウスのTACをモデルとした山口文象率いるRIA設立(1953)はその象徴である。

民衆論争や伝統論争の盛り上がる1955年、当時の若手トップ建築家であった前川國男、坂倉準三、吉村順三の3名の共同設計による「国際文化会館」と、官庁営繕に所属する若手建築家ら百名超の設計チームによる共同設計が試みられた「総評会館」が竣工する。後者は設計組織体制と建築デザインの民主化を企図したものであったが、多くの意見を取り込むことで折衷主義的な凡庸さに陥ってしまったとされる。

他方、同時代に活動を開始した東京大学丹下研究室は岸田日出刀の庇護のもと、巧みなチームワークにより構造や設備、交通など諸課題を解決しつつ形態を美しく統合した「国立代々木競技場」(1964)のような傑作を実現させ、丹下健三というスターアーキテクトを生んだ。だがその後、日本初の超高層をめぐる競争では海軍でのマネジメント経験を活かした池田武邦率いる山下設計の若手チームに敗れ、以後複雑な人工物としての超高層ビルの設計はよりアノニマスで柔軟な民間組織設計事務所がリードする。

>>>>>>>>>>>>> p.002

特集 04

共感の時代の専門家の社会参加

Social Participation of Experts in the Era of Sociempathy

本特集では、SNS等のソーシャルメディアの台頭とともに、世論が新しい力を得た現代社会における、専門家の責任境界と社会での振る舞い方に焦点を当てる。「ポスト・トゥルース(ポスト真実)」等の新語に見られるように、SNSの普及に伴い、感情に訴えかける共感ベースの意見が世論形成に大きく寄与するようになり、時に客観的な事実さえ覆すようになった。建築の成立に対しても、利用者や周辺住民に限らない一般市民のインターネットを介した意見が、行政手続きを経た意思決定を覆すほど強く作用するようになりつつある。こうした新しい力学は、社会的な出来事に対する一般市民のとらえ方のみにかかわるのではなく、出来事への専門家のかかわり方、ないし専門家の意見の公開の仕方にも大きなかかわりを持っている。

例えば、2012年に国際デザイン・コンクールが行われた新国立競技場の建築プロセスにおいては、建設費高騰をめぐる問題が明るみに出るにつれ、SNS上で審査過程や設計意図に対するさまざまな憶測が行き交った結果、最優秀賞を獲得したザハ・ハディド・アーキテクツによる提案が白紙撤回される事態となった。また、豊洲新市場では、一部の有識者とされる人物の必ずしも正確とは言えない憶測に端を発して世論は動揺し、大きな混乱がもたらされた。これらの公的な建築プロジェクトに見られた混乱は、有識者会議や設計者選定の枠組みに携わる専門家の責任のあり方を問うものでもあった。

科学技術社会論においては、科学における専門知は、絶対的な真理としてあるものではなく、ジャーナル共同体による査読システムを通じた境界画定作業によって絶え間なく更新されるものであるから、常に「つくられつつある科学」であると形容される。

他方、受注生産を基本とする建築物は一回性が強いプロダクトであり、条件が

>>>>>>>>>>>>> p.015

2017年度
日本建築学会大会
(中国)の概況

Overview of Annual Meeting of AIJ, 2017 Chugoku

建築漫画

みんながいいよね

漫画——TAO［アーティスト/デザイナー］｜たお｜1979年神奈川県生まれ。神奈川県在住。東京藝術大学デザイン科修士課程修了。mashcomix所属。

解説——登場者は鳥と人の群れ（モブ）がそれぞれでナンセンスな会話を交わしているが、オレンジの点を基準にして両者の言葉を重ねるように立体視すると「みんながいいよね」というメタ・メッセージが縦読みで浮かび上がる、ステレオグラム状のマンガである。熟議によらず、平均値でもなく、要素がネットワークされることで第3のレイヤーを立ち上げるようにして新たな集合的（=みんなの）メッセージを生み出す技術の可能性を示唆している。［松島潤平＋藤村龍至］

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年3月20日発行（毎月1回20日発行）
建築雑誌｜第133集｜第1708号

建築雑誌

2018 03

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol. 133 No. 1708

特集 05

リノベーションのジレンマ
Renovation in a Dilemma

VOL. 05

このままだと
すべてゴミに
なってしまう
［園田眞理子｜p.004］

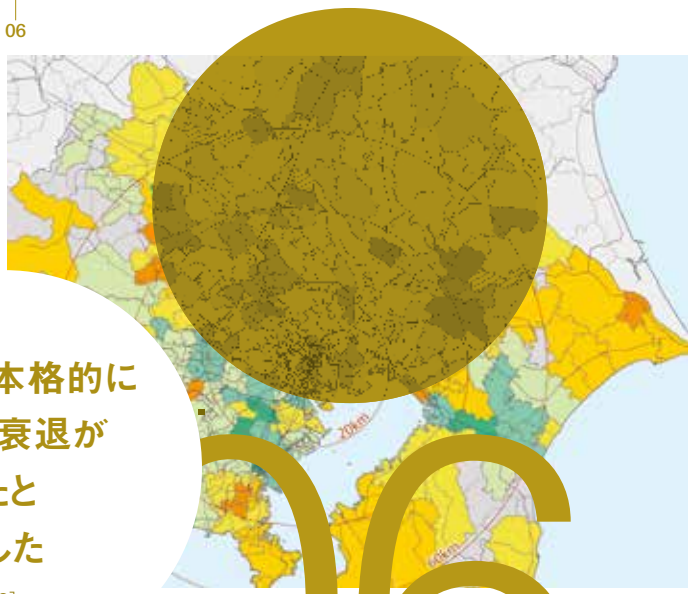
突破口は、
断熱と省エネと
健康だと思います
［田村誠邦｜p.010］

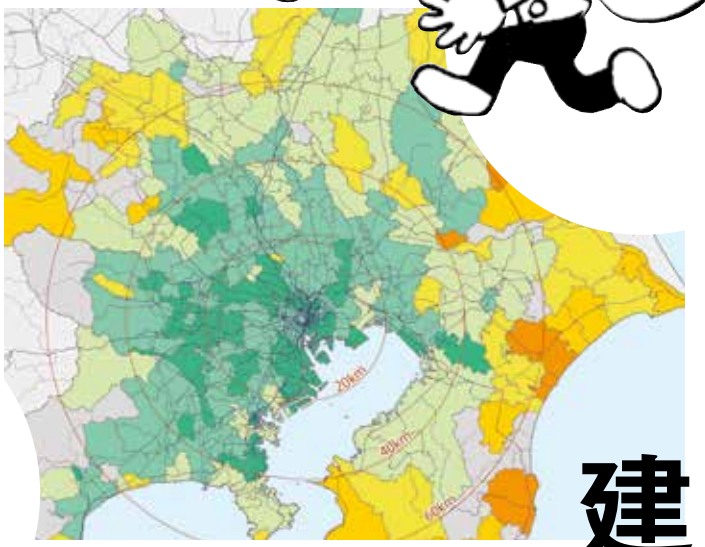
特集 06

生き残る郊外の条件
Conditions for Surviving Suburbs

VOL. 06

ついに本格的に
郊外の衰退が
始まったと
思いました
［三浦展｜p.022］





大切なのは
そこに住まう人の
QOL（quality of life）である
［樋野公宏｜p.027］

建築漫画

シティえもん「キャピ太とコンパクトシティ」

漫画―― 稲葉大明［アートディレクター］｜いなば・たいめい｜1978年生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。デザインスタジオFUNDAMENT代表。

解説―― とある国民的マンガをリノベーションしたマンガ。

少し自己批判的に眺めれば、こうした表装的な創作態度は一時的な笑いを誘うも、既存の国民的マンガが築いた文化（=躯体）を持続させるものにならないかもしれない。そして都市をコンパクトにするツールとしての都市計画も、仕組みやプロセスを置き去りにするとマンガのような計画になってしまう。［松島潤平＋藤村龍至］

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年4月20日発行(毎月1回20日発行)
建築雑誌 第133集 第1710号

建築雑誌

2018 — 04

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol.133 No.1710

特集 07

キャリアデザインとしての留学

07 Studying Abroad for Strategic Career Design

教職に就いてわかったことですが、教育の大原則は「教えられたことしか教えられない」です
土居義岳[p.007]

体験を独自に組み立てることが世界の再編成になります

アジアではそれぞれの場所で固有の課題を発見し、それに適合した調査方法を開発すべき
村松伸[p.010]

留学が、政治や社会状況に強く規定されていることにも目を向ける必要がある
林憲吾[p.010]

外国人としての目を持つことの重要性について言われたのは今でも印象に残っていますね
宮島徹[p.016]

人の意志がさまざまなかたちで建築に入り込んでいることに気づくのです
三宅理一[p.018]

特集 08

建築の「働き方」をめぐる個人と組織のライフデザイン

08 Life Design of Individual and Organization with Work Style in Field of Architecture

実際に公共空間がリノベーションされていく過程を見て、自分もそうした仕掛け側に回りたいと思いました
藤森照信[p.004]

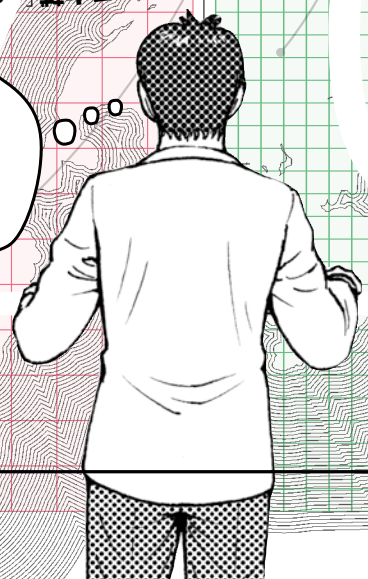
ラボ内を新陳代謝可能な仕組みにすることは、チャレンジングなチームでい続けるために重要であり
瀬川徹[p.023]

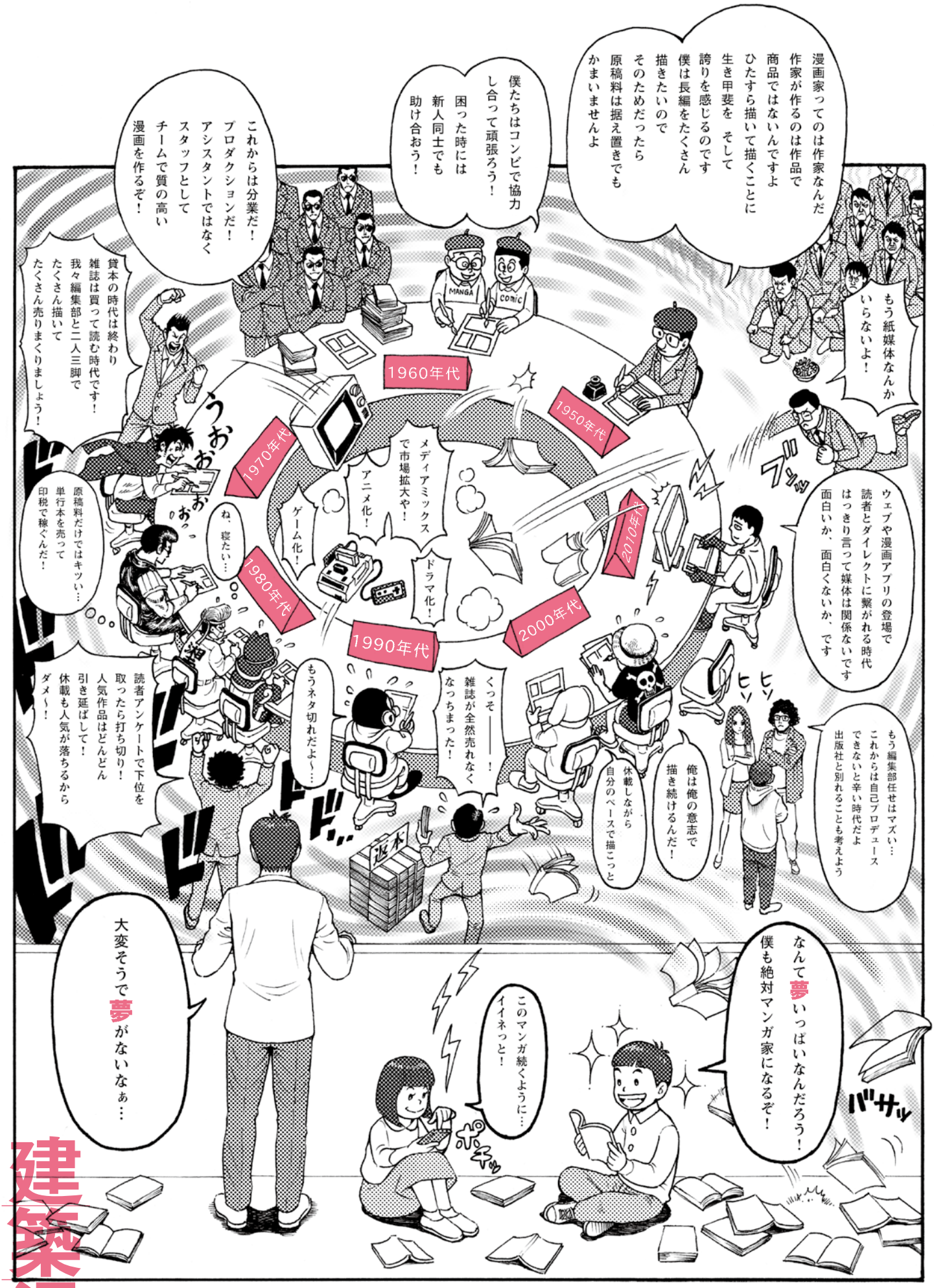
建築教育のなかで、建築をつくることが唯一の正義だと感じたことが問題だと思います
中村貞也[p.023]

意思決定のスピードを早くするためにはチームが小さいことが重要だと思います
山川智嗣[p.023]

夢…

○○○





夢のあとさき

漫画――加藤ノブキ［漫画家・イラストレーター］｜かとう・のぶき｜1977年広島県生まれ。神奈川県在住。東京藝術大学デザイン科卒業。mashcomixメンバー。

解説――50年代に超作家主義として萌芽する漫画界。供給量の激増とともに神話は解体され、振り返れば生産体制のあり方をデザインした者がその時代の漫画をリードしてきた。手摺の向こう側にある過酷な夢の生産状況が見えない子どもたちは、それでも供給され続ける絶えない夢にあこがれ続ける。［松島潤平＋藤村龍至］

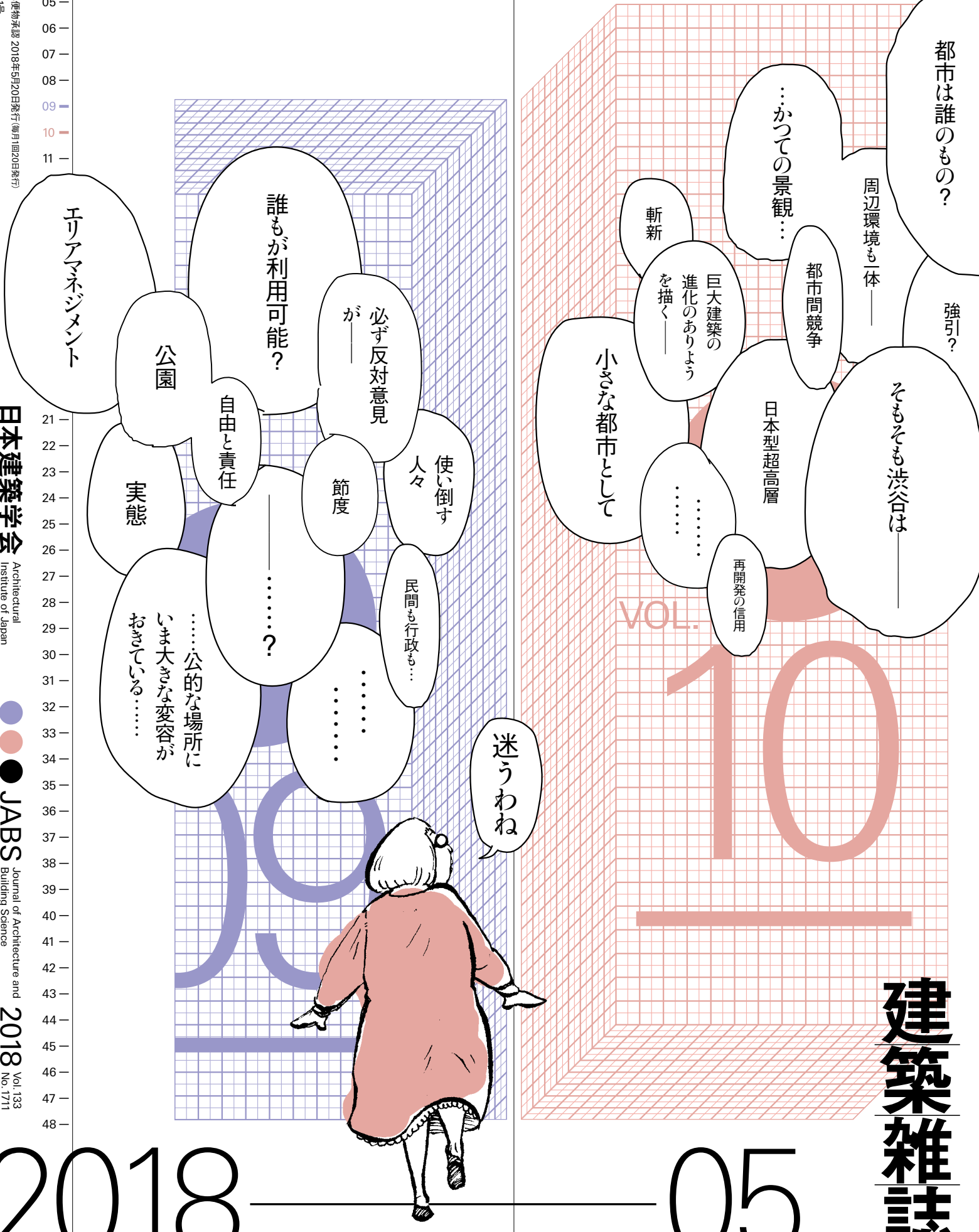
昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年5月20日発行(毎月1回20日発行)
建築雑誌 | 第133集 | 第1711号

特集 09 We Move the City with Public Spaces

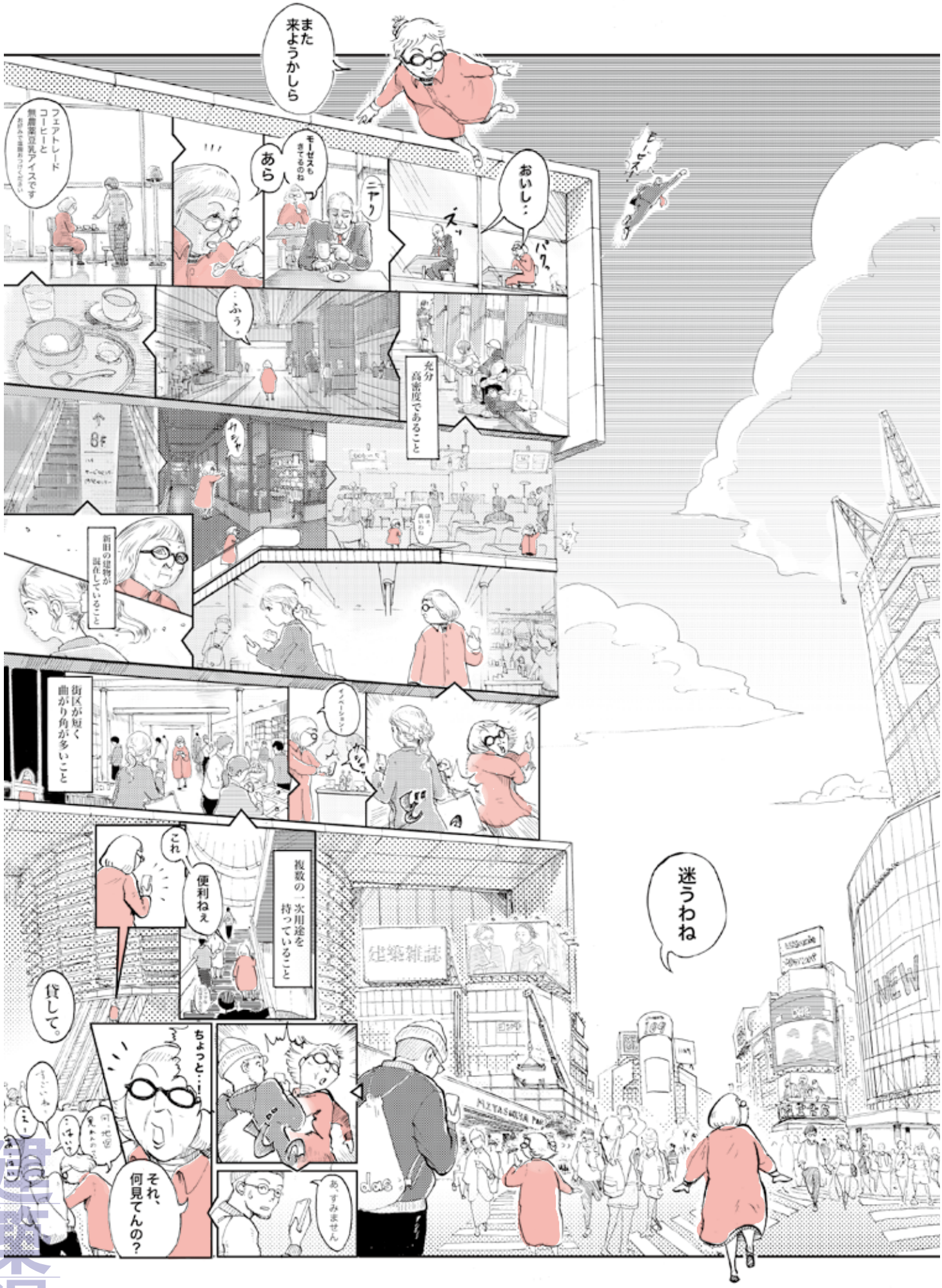
パブリックスペースから まちを動かす

特集 10 We Make/Change the City with Big Architecture

巨大建築(プロジェクト)で まちをつくる/かえる



日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol. 133 No. 1711
2018 05
建築雑誌



建築漫画

ジェイン・ジェイコブズの渋谷立体さんぽ

漫画―― 連ヨウスケ［漫画家］｜むらじ・ようすけ｜1989年神奈川県生まれ。東京在住。東京藝術大学建築科修士課程修了。

解説―― 大規模な再開発が進む渋谷。ジェイン・ジェイコブズ（1916－2006）が今この地に降り立ったなら、なんと言っただろう。立体的に展開する街を進めば、最上階では鎬を削ったロバート・モーゼス（1888－1981）も満足気に渋谷を眺めている。二人の主張がハイブリッドされた、魅力的な都市がつくられうるか!?［松島潤平＋藤村龍至］

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年6月20日発行(毎月1回20日発行)
建築雑誌 | 第133集 | 第1712号

特集 11

「構造の常識」の過去・現在・未来

11 "The Common Sense for Structural Design": The Past, Present and Future

『我々は古いものから
皮相でなくて
その深慮に横はるものを
学びとらねばならない』

『要するに私は
構造家は常識が
豊でなければならないが
常識的であつてはいけないと
云ひたいのである』

『新しい構造を
生み出して行く創意の力を
持たねばならない』

『一つの構造法には
それを生む一つの背景があり、
他の構造法には
それを生む他の背景がある』

『整理された経験は
尊重しなければならないが、
科学的に整理されて居ない経験は
甚だ迷惑なことが多い』

VOL. 11

特集 12

やわらかなビルドデザイン

12 Discretization and Integration in Build-Design

「硬さ」の時代に代表される
"デザインビルド"を超えて、
「やわらかさ」の時代の
"ビルドデザイン"を構想したい

「ビルドから始めよ」

「新しいビルドの
技術をもとに
デザインを
構築していく」

近代建築技術は
「硬い=画一化・均質化・
標準化・規格化」、対して
日本の建築技術は
「やわらかい=不均質・
個性的・特質的・バラバラ・
あいまい・千差万別」である

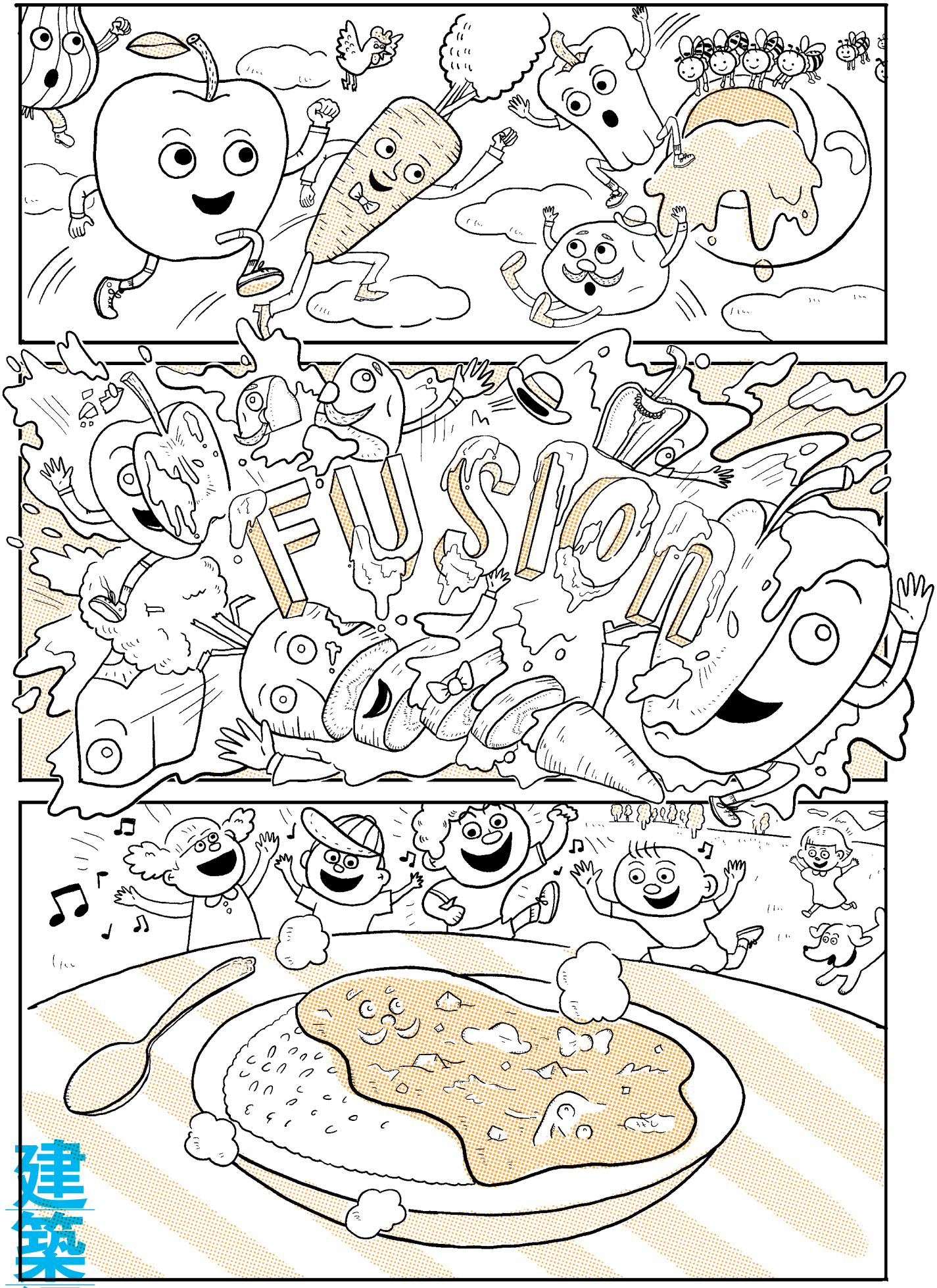
「現代の建築技術に
立脚した、
未来の建築のあり方を
導くこと」

VOL. 12

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol. 133 No. 1712

建築雑誌

2018 06



建築漫画

とろ〜りとけてる専門性

漫画―― 大西洋［イラストレーター］｜おおにし・よう｜1976年東京生まれ。北海道在住。東京藝術大学デザイン科卒業。mashcomixメンバー。

解説―― それぞれの持ち味で人々を魅了する食材たち。

専門性が集合し、カレーのように「やわらか」に溶け合えば、シナジー効果の新たな魅力でみんなをもっともっと幸せにする!?［松島潤平＋藤村龍至］

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年7月20日発行(毎月1回20日発行)
建築雑誌 | 第133集 | 第1713号

特集 13

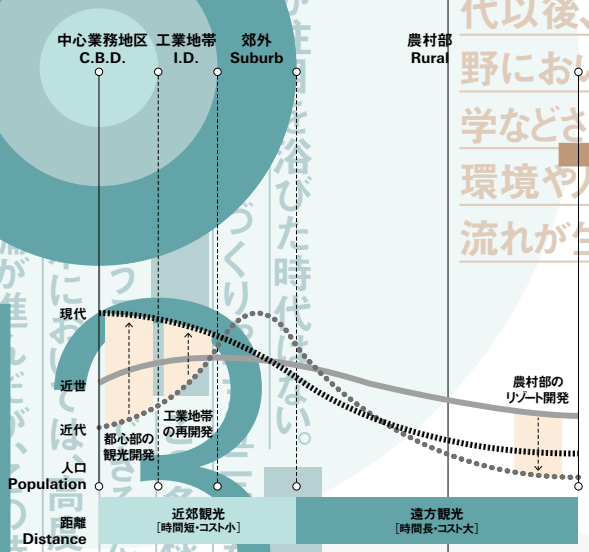
観光のアーキテクチャ:
余剰の時間と場所の読み替え

Architecture of Tourism: Redesign of Redundant Time and Place

主旨文――現在ほど「観光」という言葉が注目を浴びた時代はない。どに、今や観光は、少子高齢化や過疎化などの諸問題を抱える地域を持する基盤となり、さらには外貨獲得や経済成長に効く万能の薬である[illegible]つくり[illegible]観光という現象に対し、私たち建築や都市の専門[illegible]そのためには、観光と建築をつなぐ論理が必要だ。[illegible]時間が増加し、余暇活動のために各地で観光地開発が進んだが、[illegible]は、農業国から工業国に転換する過程で生じた〝余白〟[illegible]称リゾート法)では、特に一次産業や二次産業を主産業とする地域に対し[illegible]中心とした新たな地域振興策を展開していく」という名目のもと、多くの開発が行われた。その後の総合保養地域整備法(通[illegible]に観光は、産業の転換時に生じる余剰の時間や空間を読み替えることによって成立してきた。

p.002

VOL. 13



特集 14

人新世と都市・建築

Anthropocene and Architecture, City

主旨文――本特集では「自然」と「人」の関係についての再定義を迫る近年の思想的展開に注目し、その議論と建築の関係について[illegible]。建築デザインの理論[illegible]思想[illegible]関わりを持ち[illegible]970~90年代ごろ[illegible]概念と建築の関係[illegible]で機能的な「近代」から解放された空間・形態のあり方が問われたが、1990年代以降、そこで展開された過剰な形態操作や思弁的な議論に対する反発や[illegible]動の中で、思想に関する活発的な議論は見られなくなる。そうしたなか、2000年代以後、特に欧米諸国では人文思想の分野において人文学/芸術/社会科学/理工学などさまざまな分野が参画しながら、地球環境や人間社会のあり方を議論する新しい流れが生まれている。

p.015

VOL. 14

2018年度
日本建築学会大会
(東北)
Annual Meeting of AIJ,
2018 Tohoku

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol.133 No.1713

建築雑誌

2018 07

建築漫画

東京圏人新世的観光案内

漫画——かつしかけいた［漫画家・イラストレーター］｜1981年千葉県生まれ。葛飾区在住。篠原雅武『生きられたニュータウン』（青土社）装画など。twitter, Instagram: @ktsksketch

解説——愛すべき都心近郊の何気ない風景も、その実は人間の大規模な環境変動によってつくられたもの。そこに住まう先輩方の目線で見れば、穏やかな日常の情景はダーク・ツーリズムの対象になってしまうのかもしれない。

あるいは、人間、他の生物、植物、人工物などが相互に影響を与え合うことで実践される新しい生活や観光のあり方が待っているのだろうか。

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年8月20日発行(毎月1回20日発行)
建築雑誌 | 第133集 | 第1714号

建築雑誌 08

個々/観察/自分事/割り切り/説明/般化/実感

地方/行政/福祉/世代/家族/能力

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol. 133 No. 1714

01 —
02 —
03 —
04 —
05 —
06 —
07 —
08 —
09 —
10 —
11 —
12 —
13 —
14 —
15 —
16 —
17 —
18 —
19 —
20 —
21 —
22 —
23 —
24 —
25 —
26 —
27 —
28 —
29 —
30 —
31 —
32 —
33 —
34 —
35 —
36 —
37 —
38 —
39 —
40 —
41 —
42 —
43 —
44 —
45 —
46 —
47 —
48 —

特集

日本のすまいと六つの格差

15 The Six Housing Inequalities in Japan

●今和次郎は全国に点在する民家をつぶさに観察し、関東大震災で被災した人々が自力建設したバラックに建築の原点を見いだそうとした。西山夘三は、戦前より類型的な手法を用いた庶民住宅の実態把握に取り組み、住宅研究を通じて建築計画学の基礎を築くとともに、ごくありふれたさまざまな住まいが相互につながりながら全体として複雑な階層構成を持つ、総合体としての「日本のすまい」を具体的に記述しようとした。

●今・西山の住宅分析と並んで、吉武泰水、鈴木成文らの活躍により、住まいに関する研究領域は拡張し続けた。その研究成果が住宅行政と結びつくことで、高度成長期の都市部における住まいのなかから各種の格差やバリアが取り除かれていった。しかし今日、さまざまな格差が顕在化し、また拡大するなか、建築計画学は「日本のすまい」を総合体としてとらえ、現代にふさわしい住まいの原点を探り当てることができているのだろうか。

●本特集のタイトルにある「六つの格差」とは、現代日本の住まいを考える際に避けては通れない格差(地域間・所得・世代間・能力など)を六つに類型化したキーワード群で、建築計画学や住宅行政の来し方と行く末を展望するために用意された。第1セクションでは、西山スクールに属する住田昌二大阪市立大学名誉教授にインタビューを行い、1940年代から60年代にかけて西山が「日本のすまい」をいかに類型化し、言説化してきたかについてお話を伺う。その際、西山が住宅政策に及ぼした影響についても触れていただく。黒石いずみ青山学院大学教授には今和次郎の都市と住宅への眼差しに関する考察を行なっていただく。これにより、20世紀の日本の住まいを複眼的に捉えることが可能となる。一方で、川上浩司京都大学教授には「不便益」論の視座を提示していただく。ここではバリアや格差をうまく受容し、逆手に取りながら、より豊かな住まいを実現する方策について議論を深めたい。

●第2セクションでは、中流意識が消え、格差が拡大する21世紀の日本の住まいにまつわる六つの格差の事例を取り上げる。これら住まいの格差はどのように生み出されているのか、また、是正に向けた取組みについて、各現場に携わる新進気鋭の研究者らより紹介いただく。また、これらを並置することで見えてくる現在の住まいが抱える課題を総体としてとらえることを目指す。

●第3セクションでは、若手建築計画研究者らが前セクションで提示された六つの格差を立体的にレビューし、これからの建築計画学や住宅行政が取り組むべきテーマを照射する。---------> p.002

特集

1981年生まれ世代の建築家像

16 The Image of Architects by the Generation Born in 1981

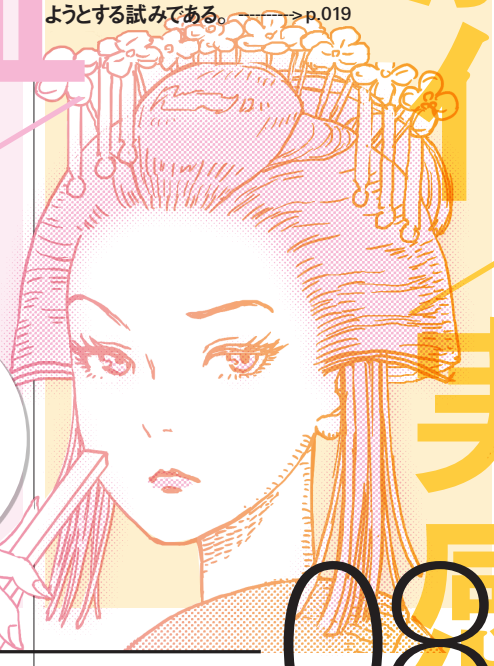
●社会が多様化していると言われるようになって、久しい。人々のライフスタイルだけでなく、それを受けて創作活動をする建築家の考えや活動にも変化が見られ、もはやまったく一様ではない。コミュニティデザイン、まちづくりなどの専門領域の越境や、新たなテクノロジーの導入など、建築家の職能自体がひとくくりにはできなくなってきている。研究分野もセグメント化が進み、一つひとつが深められているとはいえ、共通の土俵には、なかなか載せにくい。

●このまま多様なものを、多様なままに漠然ととらえていくしかないのだろうか。そのことを知るために、せめて年齢だけは共通した人たちが参加する座談会を開き、お互いに共感するものがあるのかどうか、探っていくことにした。

●かつてル・コルビュジエが「住宅は住むための機械である」というステートメント(声明)を発したのは、30代半ばのころだった。そのくらいの年齢が、幾つかの仕事を経験し、いよいよ独自の視座を提示できる時期なのかもしれない。そこで、今回はおおよそ30代半ばくらいの人々に集まっていただき、それぞれの仕事を議論のベースにしながら、多様な価値が併存する現代における、建築や建築家のあり方について議論する。

●ちょうど、その年齢にあたる編集委員の3名(稲垣淳哉、水谷元、米澤隆)を2組に分け、それぞれが共感を持っている方々に声を掛けて、二つの座談会を行った。この手探りの座談会をまとめるとともに、座談会の結果に言葉を与えるため、同じく同世代の編集者・伏見唯氏をゲストとして迎え、司会とまとめの執筆をお願いした。

●集まったのは1980年、1981年、1982年生まれの建築家。その平均をとって、仮に「1981年生まれ世代」と名づけてみたい。ひとつの世代のなかで交わされた議論だが、現代の建築家像の一側面をとらえようとする試みである。---------> p.019

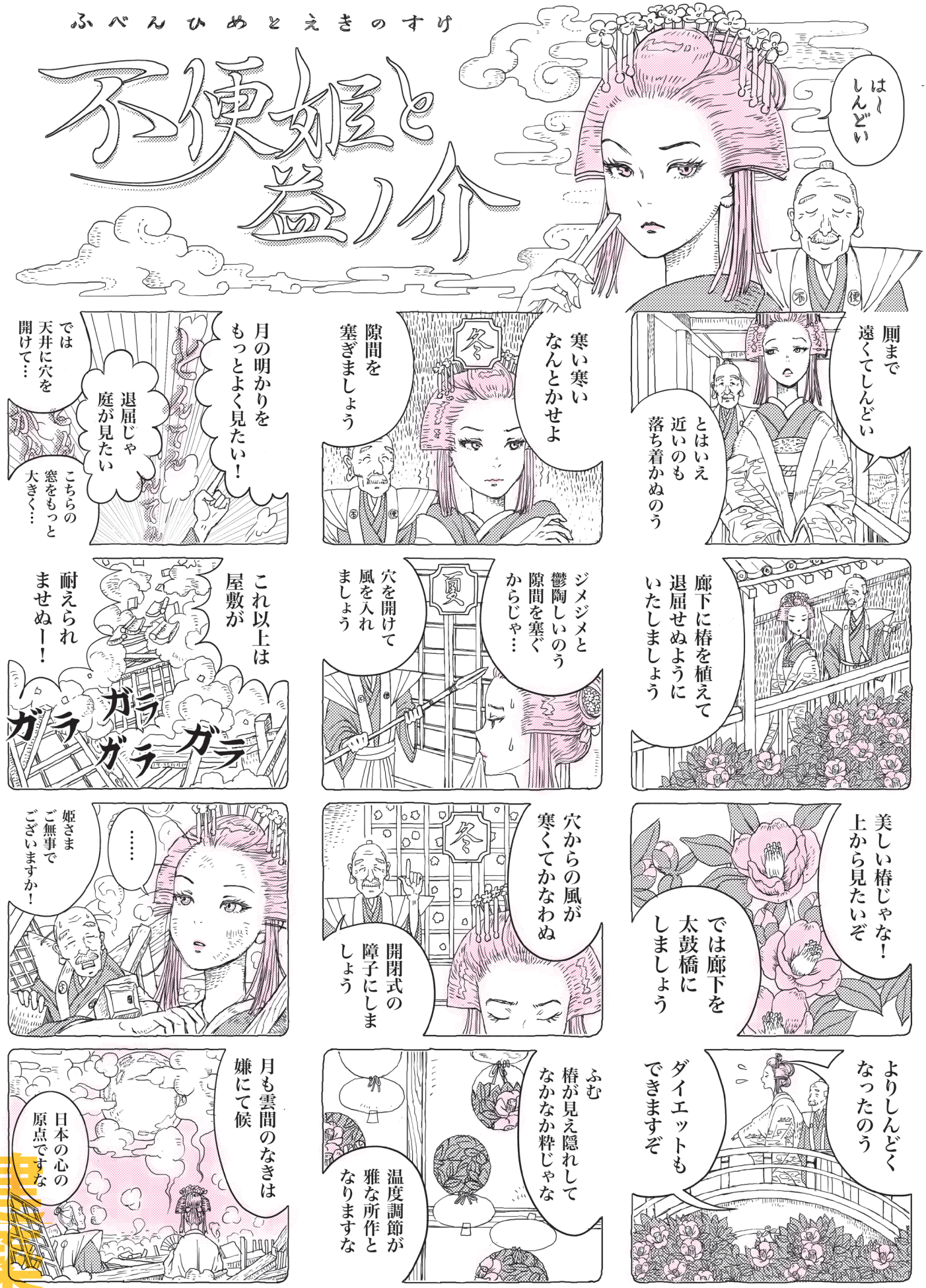


2018年
日本建築学会
各賞
AIJ Prizes 2018

2018

ふべんひめとえきのすけ

不便姫と益ノ介



建築漫画

不便姫と益ノ介

漫画——出口ヒロコ［イラストレーター］｜でぐち・ひろこ｜1978年高知県生まれ。東京都在住。東京藝術大学工芸科卒業。mashcomixメンバー。

解説——何不自由なく育ったがゆえか、わがままでぼやきがちな不便姫。しかし御用人の益ノ介が返す機転の利いた合いの手によって、不便さのなかに新たな価値観を見出していく。わび茶の始祖、村田珠光が残した「月も雲間のなきは嫌にて候」という言葉が示す、手間や不完全さを喜ぶ美意識が、現代の「不便益」というユニークな考え方へと発展しているのかもしれない。［松島潤平］

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年9月20日発行(毎月1回20日発行)
建築雑誌 | 第133集 | 第1715号

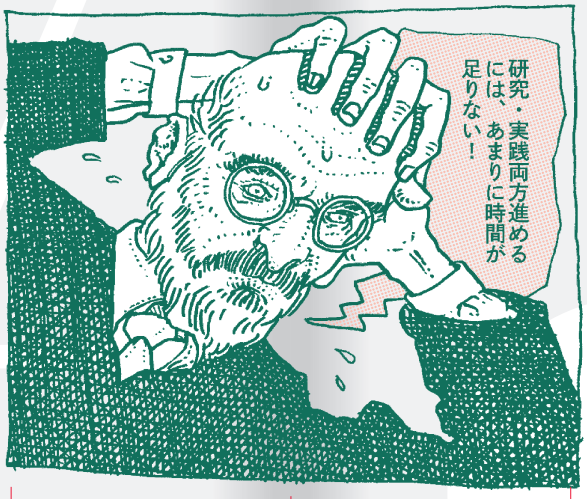
特集

再び手を結ぶ、研究と設計

17 Research and Design Join Hands Again

002

● かつての建築学の黎明期を支え、その学問体系を構築した主役の多くは、アカデミシャンとしての“学者”であると同時に実践者としての“建築家”であった。彼らによって総合学として切り開かれた建築学の黎明期と見比べると、研究の専門分化が進行し、また設計が扱う対象も複雑化・多様化した今日、**設計者と研究者の距離はますます遠くなっていると言わざるをえない。**そんな今こそあらためて“研究”と“設計”、“理論”と“実践”、ひいては“学術”と“社会”はどのようにかかわるべきなのか、問い直す必要があるのではないだろうか。おそらく、こうした問題意識の高まりは建築分野に限った話ではないが、多元的な価値や技術を統合する学問としての建築学だからこそ提示できる、次の時代の新たな研究と設計の幸せな関係を探求したい。● 本特集は以下の三つのセクションで構成されている。● **第1部では、“建築家”の概念を軸に研究と設計の関係の変遷をたどる。**現在では大学に籍をおく建築家が“プロフェッサー・アーキテクト”と呼ばれるように、いつからか“建築家”の意味するところには“学者”のニュアンスはほとんど含まれなくなった。上述のとおり、研究と設計の関係の変化とともに、“建築家”という言葉の意味するところも大きく移り変わってきているのである。● 現在の日本で建築書の担い手たる出版社は、規模の大小こそあれ、おおむね三つに類別できるだろう。**書籍の売上で経営してきた独立系**版元と、そうした日本における建築家概念の歴史を速水清孝氏に描き出していただき、建築学における研究と設計の関係がどのように移り変わってきたのかをたどっていく。● **第2部では、研究と設計ゼネコンやメーカーを源流に持つ企業系**版元、そして、**アカデミアの近傍に位置する大学出版会系**の版元である。そこで本特集は、まずこれらの版元に属する編集者の現在形をとらえる。建築学の専門分化が進むにつれ、すべての領域に精通した万能人としての専門家のあり方は現実的ではなくなり、ある意味では当然の流れとして、研究と設計はますます分離の座談会を皮切りに、建築書を編集し、出版することの意義を編集者に問い、続けて建築系テキストの著者のあり様が論じられている。● そもそも、アカデミックな場における考究の成してきた。しかし、そうした状況に対する危機感を持った研究者・設計者は少数派ではなく、日々さまざまな課題に向き合いながら、それぞれの活動



特集

建築書をつくるのは誰か
――アカデミズムと市場の回路を構築する

Who Makes the Architecture Books?
18 – Building the Circuit between the Academism and the Market

013

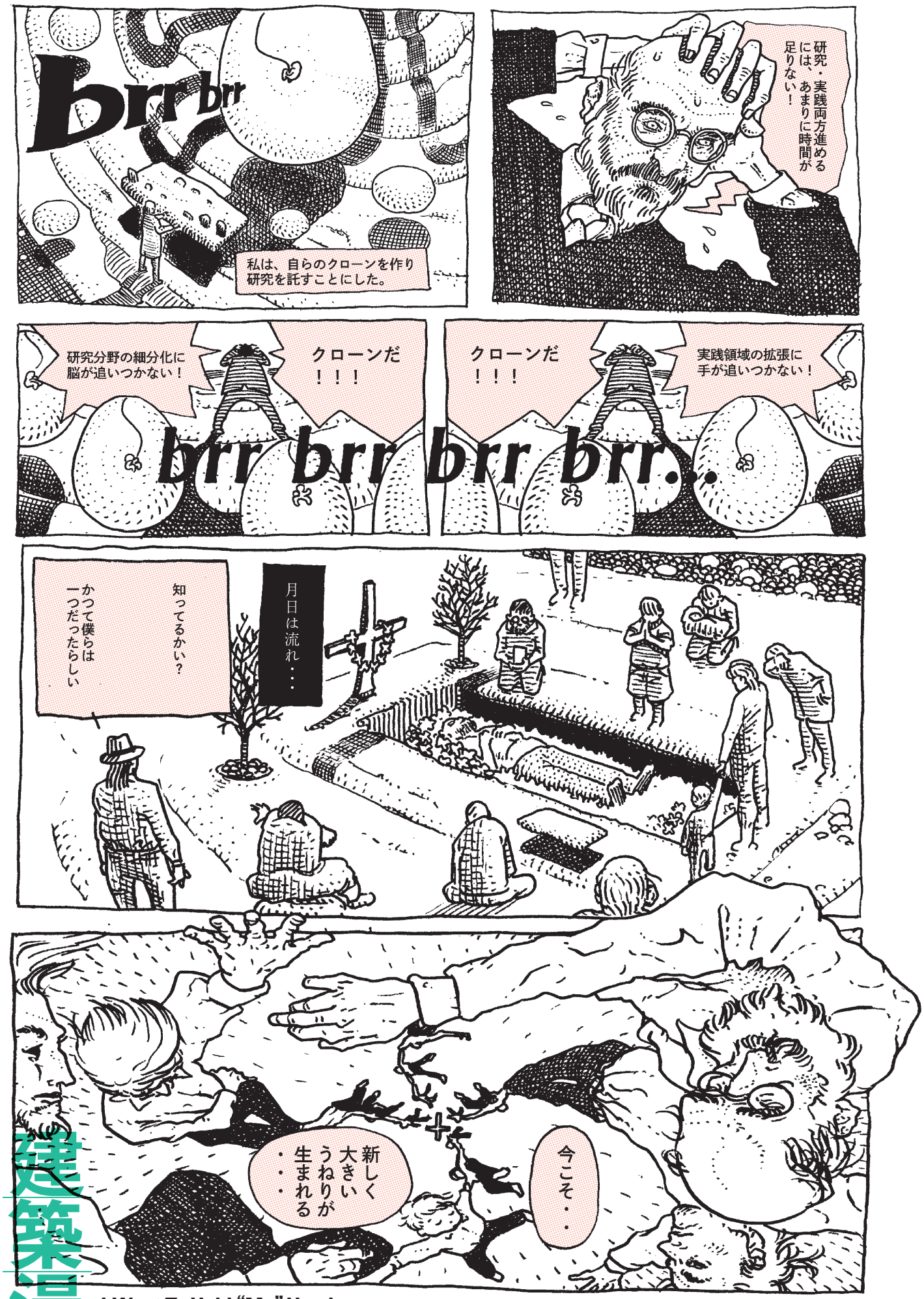
果はどのように本としてパッケージされ、**誰に読まれているのだろうか?**● 私企業としてそのような構造、環境の分野から、それぞれ川島範久氏、山田あすか氏、平岩良之氏、富樫英介氏にご登場いただき、現在の活動を踏まえつつ、それぞれの専門性から見る「研究と設計」につな書籍を制作し、流通させてきた出版社にとって、**「本は売れなくなった」**とされる昨今の業界事情は頭が痛いに違いない。しかし、ウェブサイトや電子書籍など多様化するメディアいて論じていただく。● **第3部では、研究と設計のあるべき未来像を探求する。**デザイン学を群のなかで、一覧性や再現性の高さにおいて紙専門とする水野大二郎氏には、RtDベースのメディアが優位を(Research through Design)と呼ばれる新しい研究および実践の形保っている面もあるだろう。● p.013に示す表は、現式についての世界的な動向の整理在に連なる出版メディアと、それを踏まえたうえでの未来の建築学に向けた問題提起を行っている。著者と出版社、そして、読者によって群の見取り図でもある。ただく。また、設計方法論を長年探求されてきた門内輝行氏には、研究と建築をめぐる言説空間が構成されるならば、建築書の未来設計が連動した活動を行うためのスキルや能力などの「人」の問題と、そうにとって、潜在的著者であり読者でもあるわれわれは、まさにした人材を教育する大学や学問の枠組みといった「制度」の問題の両面当事者そのものだ。● **書籍は、著者の知見を閉じ込めた文化的なプロダクトだ。**著者の社会的属性や性別、年齢を問わず、本から、設計と研究の関係のあるべき姿と、その両義的活動の場としての建築アカデミーの未来像を描き出していただく。● さらに、特集全体に対する付記として、今回得た学びを担当編集委員が総括する頁を最後に設という形をとることによって、知は、市場を経由して社会に等しけた。建築アカデミズムとアカデミーに関する問題は、次年度にもさらにくもたらされる機会を得ることになる。これは**アカデミズムにとって重要な社会貢献の回路**でもある。本特集では、書籍を企画し、編集するつくり手にフォーカスして、建築書という回路が今どのように「設計」されているのかを探ろうとした。かつてのにぎわいを懐かしむのではなく、建築書のこれからを構築するために。

建築年報 2018
Annual Report of Architecture 2018

Research and Design Join Hands Again

Who Makes the Architecture Books? – Building the Circuit between the Academism and the Market

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol.133 No.1715
建築雑誌
2018 09



建築漫画

I Want To Hold “My” Hand

漫画——軍司匡寛［ビジュアルアーティスト］｜ぐんじ・ただひろ｜Brooklynベースのビジュアルアーティスト。gunjitadahiro.com
NON-GRID Inc.に所属して、デザインディレクターとしても活動。漫画談義MANDANにメンバーとして不定期出演中。

解説——ひとつの志から始まった文化体系が、複雑な世界に対峙するべく無尽蔵に細分化、拡張化してしまった今。しかし一度細かく多く分かれたからこそ、手をつなぎ、掛け合わせたときの可能性もまた無尽蔵なものとなるはずだ。いろいろな方向へ分かれたこと、増えたことは、決して無駄なことではないと信じたい。［松島潤平］

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年10月20日発行（毎月1回20日発行）
建築雑誌 | 第133集 | 第1716号

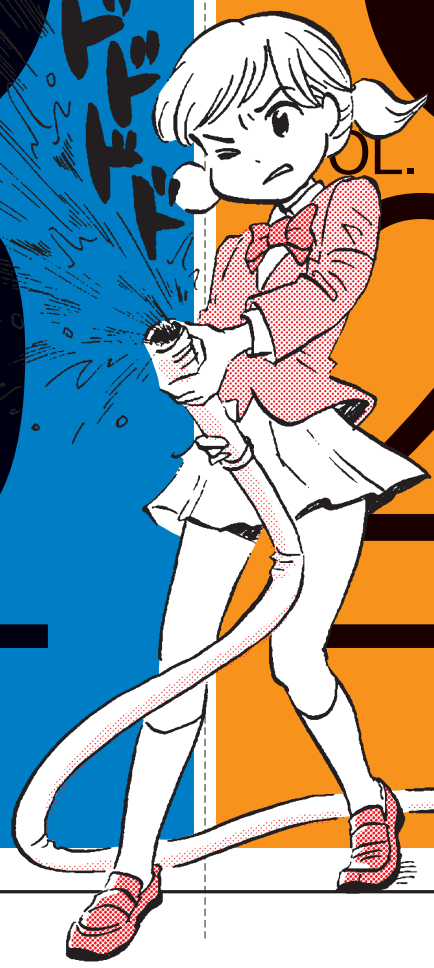
特集 「木造建築の正しさ」と、その危うさ
19 Critics on Contemporary Timber Architecture and Its Relation to Japanese Forest and Society

特集 既成市街地の木造火災から考える
20 Think about Fire on Wooden Buildings in Existing City Area

木火

VOL. 19

VOL. 20



建築雑誌

2018 10

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol. 133 No. 1716

解説

❶早期発見が市街地火災の規模抑制において極めて重要である。❷住民一人ひとりのエリアに対する認知度の高さが求められる。❸クラウド化された街のビッグデータを共有し、街独自の防火対策を即時検索できるシステムが望まれる。❹省エネ化・高性能化のトレードオフとして、新たな火災のリスクも生まれ続けていることを忘れてはいけない。❺可搬消火器具の使用経験が一度でもあるかどうかが重要である。❻近未来において女子力の高さを示すツールとなる可能性はゼロではない。❼街のなかの水源位置を住民が把握、または即時検索できる必要性がある。❽誰もがいつでも消防要員となれることが、自主防災の最終目標である。❾日々、裸火に触れて扱いに慣れることも火災教育という観点において重要である。❿大規模火災につながる可能性が高いので注意が必要である。

建築漫画

自主防災のひみつ

漫画――ウラモトユウコ［漫画家・イラストレーター］｜1981年福岡県生まれ。東京都在住。10月から『イブニング』で離乳食漫画「宝ちゃん、あーん！」連載開始。

解説――社会構造の変化に伴い生まれ続ける新たなリスクにより、どうしたって市街地火災は起こりうる。最も強力な対抗手段である自主防災の垂訓は上の通り。そのスタートは世代を問わず自らの住む街を知り、みんなと情報を共有し合うこと。つまり市街地火災とは、コミュニティ問題の最もクリティカルな現れなのである。［松島潤平］

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年11月20日発行(毎月1回20日発行)
建築雑誌 | 第133集 | 第1717号

特集 21
政策と実務から考える建築環境工学
Policy and Practice in Architectural Environment Engineering

特集 22
北方文化圏における建築の普遍性と多様性
Universality and the Diversity in the Architecture of the Northern Regions

● 「私が一番いいたいのは経済の問題。これをやらなければ駄目だということで、これは一人ではできませんね。(中略)経済と結びついた原論の結論というか、そういうものを出さなければならない」。

● 『建築雑誌』1962年8月号「鼎談『計画原論』前後」において、建築環境工学の泰斗である渡辺要(東大名誉教授)は、皆の力で計画原論と経済を結びつける努力が必要、と強調している。半世紀経った今日において渡辺の発言を咀嚼すれば、「建築環境工学の基礎研究と政策をダイナミックに取り結ぶことこそ建築学会が取り組むべき課題である」とも理解できる。

● 一方で、「鼎談『計画原論』前後」が公にされたのとほぼ同時期、早稲田大学で建築環境工学を教えた井上宇市は、大学での研究を続けながら、丹下健三・坪井善勝らと協働して国立代々木競技場を設計し、実現に導いたことは広く知られている。

● 極論すれば、渡辺と井上はその後の建築環境工学の対極的なロールモデルとなった。前者は基礎研究を政策に反映させ、社会全体に訴えかける大学研究者の方向性であり、後者は最先端の環境工学的知見をモノとしての建築に組み込み、サステイナブルな建築(半世紀以上持続する建築)の実現に貢献する実務者の方向性である。

● 本特集は「政策と実務から考える建築環境工学」と題し、裾野が広がり続ける建築環境工学の今日的課題を浮き彫りにしてみたい。

● 第1セクションでは、「基礎研究から政策への展開」をテーマとして、村上周三氏・岡部明子氏・小泉雅生氏の座談会を企画した。また、論考では川久保俊氏に建築分野におけるSDGsの関係性、西尾健一郎氏には行動変容策による省エネルギー化促進に関する動向、西宏章氏には自治体主導による省エネ改修制度であるグリーンニューディール政策実装の現在について論じていただく。

● 第2セクションでは、「実務から考える今後の環境工学の射程」をテーマとして、井上の元で代々木競技場の設備設計に関与した尾島俊雄氏と、現在の設備設計の第一線で活躍する髙間三郎氏、荻原廣高氏の座談会を企画した。また、論考では、川島範久氏に環境配慮型建築の設計プロセス、特に設計時と運用時における統合(コミッショニング)について論じていただく。

● 第3セクションでは、「領域を跳躍するアップカミングテクノロジー」をテーマとして、環境政策や建築環境計画・設備の実務とは別次元の、注目すべき取組みを四つ紹介する。そこでは、新たなセンシング・解析手法によりこれまで把握できなかった環境が可視化されるとともに、新技術・新素材によりインフラのあり方に変革が起こり、SDGsを達成することが期待される。いわば、未来の環境政策と環境計画・設備の実務を根本的に問い直すターニングポイントとして期待される。

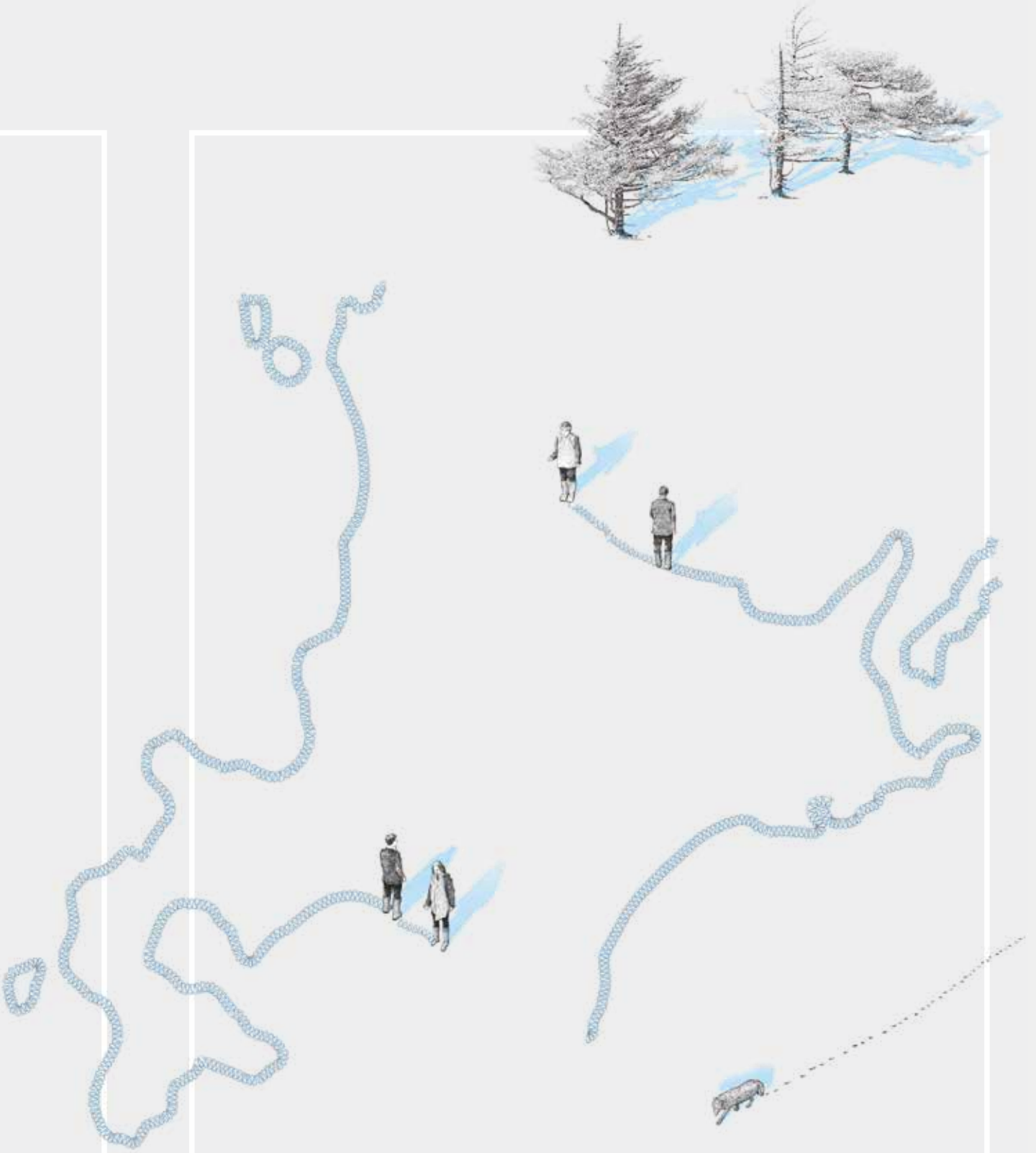
● 北海道は建築アソシエーションの理想形である。

● 亜寒帯に属する北海道の厳しい気候は、江戸末期に本州から持ち込んだ近世の建築文化や生活文化を拒んだ。そのため北海道はロシア、アメリカ、ドイツ、カナダなどの北方文化圏に範を求め、建築技術や産業技術を積極的に輸入する。明治期の開拓には近代都市計画が大胆に実験的に適用され、これはそのまま現在の北海道の骨格となっている。住宅建築においても「近代的な建築や設備などの技術を積極的に取り入れ、より合理的に、より技術的に、より温かい室内空間を持った住宅にしなければならない」との考えのもと、さまざまなカタチでモダンデザインが積極的に取り入れられた。

● 1948年の北海道大学工学部における建築工学科創設、建築学会支部創設は、寒地建築の研究や技術者の育成を一段と推し進めた。同時に北海道の建築文化や芸術文化についての議論が活発化する。北海道大学建築工学科の創設とともに赴任した太田實は、北海道の建築学、都市計画学の研究と人材育成に尽力するとともに、現在まで脈々と続けられる「北海道建築作品発表会」を初めて開催した。北海道における建築と文化の地域批評レベルの向上と、建築文化の普及が目的であった。以来北海道では、組織やアトリエ、設計者や研究者の垣根を超えて建築をレビューする場が受け継がれている。1981年に始まったこの発表会は、その後1989年に刊行が始まる『作品選集』のモデルとなった。

● このように北海道の厳しい気候風土における近代化の取組みは、建築性能と意匠の活発なトライアルと議論を生み、特徴的な建築アソシエーションと北方建築文化を育てた。日本の各地域ではそれぞれ異なる気候や文化に対して、独自の建築文化や批評の場を形成してきたし、現在も各地でそうした取組みが試みられているが、本特集では北海道をそうした地域建築の象徴と位置づけ、地域に特徴的な建築アソシエーションや建築文化の醸成についての議論を起こすことが目的である。

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol. 133 No. 1717
VOL. 22
2018 11
建築雑誌



建築漫画

外断熱北海道雪中景

漫画——松島酸化鉄［元イラストレーター］｜1979年長野県生まれ。東京都在住。
2011年までstudio lithiumを主宰し、細密鉛筆画とさまざまなテクスチャを混合したイラストを制作。以降趣味で稀に絵を描く。
解説——美しく真っ白な雪原は、死に直結する景色でもある——そんな厳しい気候風土のなか、設計者や研究者たちはスクラムを組み、活発な議論のもと大胆な実験と地道な検証によって、北海道をまるごと外断熱で覆いきるほどに安定した居住環境を獲得する成果を得た。その膨大な足跡は、マンパワーの偉大さという感動を差し引いても、雪原に新たな美しい文化的風景を築いている。［松島潤平］

昭和22年9月18日第三種郵便物承認 2018年12月20日発行（毎月1回20日発行）
建築雑誌｜第133集｜第1718号

日本建築学会 Architectural Institute of Japan
JABS Journal of Architecture and Building Science
2018 Vol. 133 No. 1718

建築雑誌 2018 12

特集

デジタル・ヴァナキュラー

24 Digital Vernacular

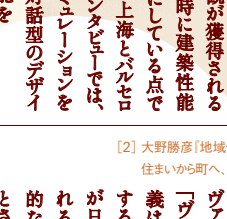
二つのヴァナキュラー

●デジタル・ヴァナキュラーとは、コンピュータ・シミュレーションやデジタル・ファブリケーションといったデジタル技術により再獲得された、新しい風土性のことである。本特集におけるヴァナキュラーは、建築学で論じられる「環境的制約によって生じた建築物そのもの」と、民俗学・文化人類学で論じられる「市井の人々の自立的な生活行為」の二つの意味合いを持つ。そのため、下記の2部構成で議論を展開することで、双方の視点からデジタル・ヴァナキュラーを浮き彫りにしたい。

——

土着的なデジタル建築について

●1964年に開催されたB・ルドフスキーの「建築家なしの建築展」以降、建築学では幾度となくヴァナキュラーが言及されてきた。そのなかのひとつである、産業化時代の現代民家としての「インダストリアル・ヴァナキュラー」は、物の移動が地球規模で行われる中央集約的な大量生産を背景にしていた。一方で、デジタル・ヴァナキュラーが前提とするのは、インターネット的な自律分散型の生産体系である[1]。この新しい社会基盤は、かつて大野勝彦が提示した、生産と流通のショートサーキットの形成と、建築家自らが部品をつくることを実現しつつある[2]。ここで重要なのは、現地調達によって土着的な外観が獲得されるだけでなく、同時に建築性能の担保を可能にしている点である。第1部の上海とバルセロナの研究者のインタビューでは、コンピュータ・シミュレーションを活用した環境対話型のデザインと、目的性能を満たすために最適化されたロボティック・ファブリケーションとの同期が示されており、ポストヒューマンの時代におけるデジタル・ヴァナキュラーな建築のあり方について議論を展開した。



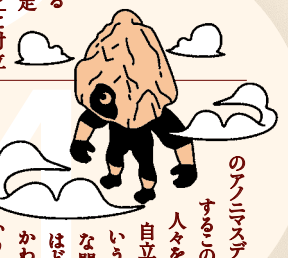
[1] 秋吉浩気「自律分散型の生産システムをつくる」（『新建築』2018年10月号）

[2] 大野勝彦『地域住宅工房のネットワーク：住まいから町へ、町から住まいへ』（彰国社、1988）

——

アノニマスな生産行為について

●民俗学・文化人類学で言及されるイヴァン・イリイチによる「ヴァナキュラー」の定義は、「産業的なもの」に対立する概念として扱われ、「人々が日常の必要を満足させられるような自立的で非市場的な行為を意味することば」とされる[3]。デジタル・ファブリケーションの普及による、ユーザーの主体的な生活環境の創出は、正にイリイチの定義に合致する状況と言えるだろう。いわば、デジタル・ヴァナキュラー時代のアノニマスデザインに関するこの議論には、人々をいかにして自立させるかという〈教育的〉な問題と、専門家はどのようにしてかかわっていくのかという〈職能的〉な問題を孕んでいる。第2部では、前者の問いに対して、最先端のデジタル技術を初等教育に応用した〈新時代の教育者〉のインタビューを実施し、後者の問いに対しては、機構をオープンソースとして公開しつつも開発コミュニティの形成に尽力する〈新時代のエンジニア〉のインタビューを実施した。両者に共通するのは、人々の自律的な生産行為を支援するために、誰もが真似しやすいテンプレートと、誰もが扱いやすいデザインツール、誰もが参画しやすいコミュニティの設計を行っている点である。最後に収録された対談では、これら他領域の実践を題材にして、建築におけるアノニマスデザインの先駆者である2名の建築家と共に、デジタル・ヴァナキュラー時代の建築家像について議論を展開した。

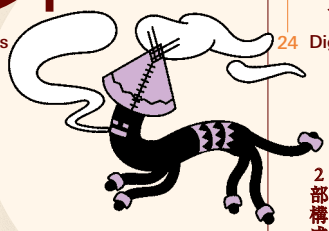


[3] I・イリイチ『シャドウ・ワーク——生活のあり方を問う』（岩波書店、1982）

特集

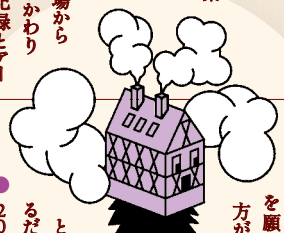
建築のレコード・マネジメント

23 Records Management for Architectural Archives



●本特集では建築の記録のあり方を考える。記録のあり方に注目することで、建築にかかわるそれぞれの立場からアーカイブズとのかかわりを検討し、建築の記録とアーカイブズの課題を広く共有したい。そのための補助線として、ここではアーカイブズ学におけるレコード・マネジメント（記録管理）に注目する。

●「記録を大切にする社会へ」——。日本建築学会建築博物館の初代館長に就いた林昌二は、2003年1月の開館に際してこう唱え、「アーカイブズの小さな芽」と喩えた同館の発足が、記録を大切にする風土を醸成する契機となることを願った[1]。記録のあり方がさまざまに世界を融かせる今、私たちは建築の記録をどのように扱い、未来へとつなぐことができているだろうか。



●2000年代以降、日本建築学会建築博物館をはじめ、新たに幾つもの建築アーカイブズ機関が設立された。なかでも、建築資料を専門に扱う唯一の国立機関としての文化庁国立近現代建築資料館の開館は、日本の建築文化の歴史においてひとつの里程標となろう。既存のアーカイブズ機関も含めて、そこでは独自のコレクションポリシーに基づき、建築が生み出され、使われてきた過程で生じるさまざまな記録（資料）の収集・保存が進む。建築アーカイブズの芽は着実に枝を広げている。

●しかしながら、アーカイブズにおける記録の収集や公開に向けての活動が進んできたことで見えてきた課題もある。例えば、アーカイブズの活動を制限しうる、設計図書の譲渡や公開を制限する設計委託契約の存在である。あるいは、今まさに進行している設計活動の記録（ボーンデジタルの図面や文書、BIMデータなど）、法で定められた保存期限を過ぎた記録（確認申請書類や営業記録など）の取り扱いなどである。それらはどう残され、利用されうるのか。こうした課題は、記録がアーカイブズに移管されて歴史資料となる以前の記録管理にもかかわることである。

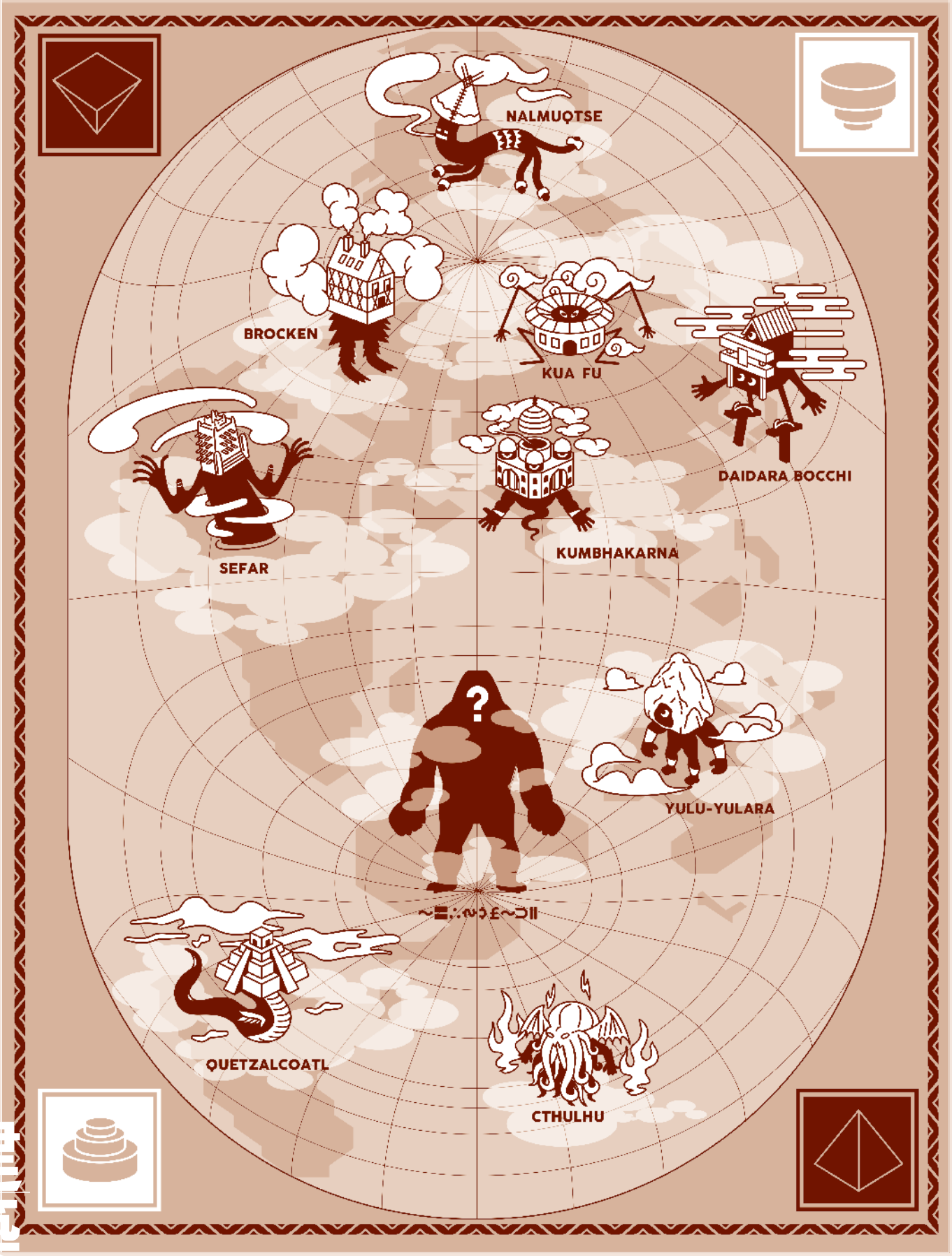
●第1セクションでは、本特集の補助線となるレコード・マネジメントについて、アーカイブズ学の立場から解説していただくとともに、建築分野におけるアーカイブズとレコード・マネジメントについて論じていただく。

●第2セクションでは、歴史的な記録を取り扱う建築アーカイブズの立場から、日本建築学会と国立近現代建築資料館の取組みと、そこから見えてきた課題を論じていただく。また、海外事例として、建築家資料や建築行政記録など、都市の建築についてのさまざまな記録を扱うアーカイブズが並存するブリュッセルの事情を紹介いただく。

●第3セクションでは、記録が生産される現場から、現在の設計組織における記録管理とアーカイブズの構築に向けた取組みを紹介する。ここではデジタル技術にも目を向け、BIM等を利用した設計・施工・維持管理における記録管理の実況やアーカイブズに向けての課題を論じていただくとともに、都市スケールのプロジェクトにおけるBIMの導入、3D都市データの収集・活用の事例を紹介いただく。また、大学が計画者・設計者・使用者としてかかわるキャンパス計画を通して、新旧の記録の役割と意義を論じていただく。

[1] 林昌二「建築博物館という小さな芽」（『建築雑誌』2003年1月号、連載「建築博物館が欲しい！」第13回）

世界雲勢図



建築漫画

世界雲勢図——CLOUD GIANTS

漫画——Text5［イラストレーター］｜神奈川県生まれ。東京在住。企業のインハウスデザイナーとして従事する傍らマンガやフリスビーのイラストなど、マイペースに活動中。

解説——「風土が共同幻想をつくり、共同幻想がまた新たな風土をつくる」

世界各地に残る巨人伝説は、それぞれの地域に発生する雲のもとで雨土から成り立ち上がるヴァナキュラー建築の姿とも重ねられる。

その環境下で代々生まれ育つ人間たちのつくり出すデジタルのクラウドが、今新たな地域建築の付喪神を描き始めている。

神々の吐く雲が地球とネットを巡り、もしかすると人類未定住の南極大陸にも新たな巨人伝説が生まれるかもしれない。［松島潤平］